

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫



◆◆◆ No.0494 ◆◆◆

18/08/01

【「円高有利」な8月だが、近年は逆転現象も!?】

昨日終了した7月相場は、月間変動幅 2.97 円だった。経験則を踏まえたうえで、2014年7月以来、4年ぶりの小変動にとどまった前月の反動、大相場を期待していたのだが、結果は無残なものに終わったと言わざるを得ない。

そんな今年のドル/円相場は前述した6月、7月だけでなく、年初来の動意が総じて乏しい。実際、年明け以降の変動幅はおよそ8円、変動率は7.8%にとどまっている。よもや、年間変動率が1ケタ台に終わった昨年の二の舞はないと信じていたが、油断は禁物だ。本日から始まる8月相場が、その最初のカギを握っている気がしないでもない。

◎今年も材料的にも「円高有利」だが……

当レターの恒例となっている、経験則をもとにした月間の相場予測、8月相場の見通しを以下で考えてみたい。

まず星取表はというと、1990年以降昨年までの28年間で11勝17敗、「円高有利」の状況となっている。また、こうした「円高有利」な状況はドル/円だけでなく、一部のクロス円についても見て取れるようだ。一例としてユーロ/円を挙げると、2007年以降2011年までの5年連続を始め、2000年以降の18年間では実に12回も円高が進行していた。つまり、8月相場は、単なる「ドル/円における円高有利」というだけでなく、「クロスを含めた円全面高の展開に要注意」であるのかも知れない。

とくに、今年に関しては、昨7月31日の日経新聞マーケット欄「8月円高の経験則」でも報じられていたように、材料面でも「8月の円高」を予想させるものが少なくない。

日経新聞がかなりよくまとめていたので、詳細はその日経のバックナンバーに譲るとして、ひとつだけ例を挙げれば、やはり「米貿易問題」になる。それも、これまでのような米中や米欧に続く、日米2国間の「直接対決」が実施されることがジワリと懸念されても不思議はないように思っている。

なお、具体的な日時について、日本農業新聞が先行する形で「日米新貿易協議、8月10日にも初会合」と報じていたが、昨日正式に政府サイドから「8月9日初開催」――と発表されている。ともかく、来週末にかけて、協議が実際に開始される公算が大きく、それを視野に入れつつ、マーケットでは円高圧力が強まる可能性も否定できないだろう。

ただし、前述した「8月は円高有利」との見方に、水を差すようだが、実はひとつの「抜け道」がある。それは、ドル/円を例にとると、2011年以降という直近6年だけに絞った場合、5勝1敗で「圧倒的なドル高有利」。先の見通しと正反対の戦績を残していることだ。

しっかりとした理由はわからないものの、知人である外資系ファンドマネージャーからは、「8月相場は日経新聞などでも取り上げられるぐらい、『円高有利』という見方が一般的にも浸透するなか、夏枯れで流動性の乏しいマーケットにおいて投機筋などが経験則を逆手にとったオペレーションに動き、それが奏功している」――可能性も取り沙汰されていた。

いずれにしても、過度の「円高有利」信奉は注意する必要があるようにも思われる。先で指摘した「米貿易問題」についても、最近のトレンド(?)は、「懸念の高まり＝リスク回避の円買い」ではなく、「新興国からの資金還流にともなうドル買い」であることは頭に入れて損はない気がしている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

